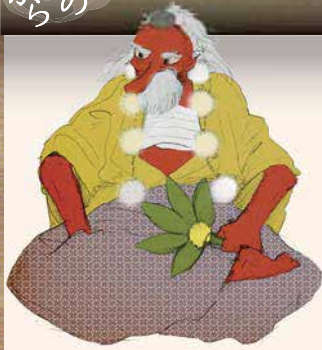


熊野の  
木林から



「天狗」日本  
うしていら  
といえられ  
した存在と  
出た深い伝  
にも関わり  
山に様々な  
熊野の人間  
（イラストはBoBo）

やっ来てられ  
た。那智の滝  
（二の滝の上  
流にある二の  
滝の近くに庵  
を結び、千日  
の修行に入ら  
れた。修行中

# 怪熊野

其の二十  
「天狗（其の一）」



和歌山大学  
システム工学部  
環境システム学科  
中島敦司教授

日本の怪異として「天狗」は良く知られる存在だ。熊野の地にも天狗の話はたくさん伝えられている。寛和2年(986年)に、藤原氏の策動により在位2年にも待たずに19歳の若さで退位、出家された花山(かさん)法皇は、深く傷ついた心を癒すため熊野に

の花山法皇のもとに天狗が現われては様々な妨害を加えたので、陰陽師の安倍晴明を呼び寄せ、天狗の妨害を防ぐよう命じられた。晴明は魔物を狩籠岩屋(かりこのいわや)に封じ、法皇は無事に千日の修行を終えることができたという。その後は、那智の行者に懈怠(けたい)があればたちまち天狗が出て煩わしい害をなしたという。これは、日本初の仏教通史である『元亨釈書(げんこうしゃくしょ)』や『源平盛衰記の巻三(波卷)』に書かれた内容であるが、狩籠岩屋は固有名詞ではない。狩籠とは、狩って籠める(閉じ込める)という意味で、魔物を封じ込めた岩屋のこと。『紀伊続風土記』には「晴明の社は那智神社(現在の那智大社か飛龍神社)の東3町(300)ほどばかりにある、いま社はない、晴明橋という橋がある」と書かれており、清明橋の痕跡は実際の場所から動かされてはいるものの、その痕跡は今でも見ることができる。



熊野の地には陰陽師、安倍晴明による奇跡の足跡を今でも見つけることができる。写真は、龍神村の谷口地区にある晴明神社。

このように那智を訪れた安倍晴明であるが、その道中で様々な奇跡を起こしている。例えば、本宮の皆地(みなち)には、ヒルに血を吸われて困っている村人のためにヒルを封じ込めた「蛭伏せ石」が今でも残されている。民家の庭先にあるので、気軽な見物はお控え頂きたい。また、皆地には以前にも紹介した「伐っても伐れない木」の話があるが、村人からこの話を聞いた清明は、満月の夜に大楠の枝をつたって鏡神社を訪れる大池の主の仕業であること突き止め、伐り倒すためには昼夜休まず斧を入れつつ、その伐り屑をすべて焼きつくすように伝えた。村人は、その言葉通りにして、ようやくの伐り倒すことができたという。その他でも、熊野の各地で土砂災害など災いを引き起こす魔物を封じた話が伝えられている。

中島敦司(なかしまあつし)教授プロフィール  
昭和38年、岐阜県生まれ。三重大学大学院生物資源研究科博士後期課程を修了。平成8年から和歌山大学システム工学部講師、12年から助教授。19年から教授。51歳。専門は森林生態、自然再生、砂漠緑化、海岸林再生、地域資源、地球温暖化、自然エネルギー、民俗(妖怪、伝承)、NPO活動にも力を入れる。熊野方面には年間30〜50日は訪問し、研究する。

